



# Theatre & Policy

2015年5月1日  
第90号

特定非営利活動法人シアタープランニングネットワーク

## 美しい風景

～パフォーミング・アーツ指導者のための身体表現を探る～

### TABLE OF CONTENT

- 1 美しい風景
- 3 “カメレオン”レイチェルが  
教えてくれたこと
- 4 ワークショップのキュレー  
ションということ
- 6 ナショナルシアター物語(9)
- 8 2015年TPNファンドへの  
ご支援のお願い/編集後記

### 鈴音 彩子

2015年3月29日-31日に行われたワークショップ「パフォーミング・アーツ指導者のための身体表現を探る」(NPO法人シアタープランニングネットワーク主催)。3日間のうち、セミナーと1・2日目のワークショップに参加させていただきました。講師はレイチェル・スミスさん。通訳は中山夏織さん。

全体的な感想はこんな感じです。

簡潔に⇒“楽しかった。”

丁寧⇒“自然体で居られて、そこで起こる事や自己の存在、時間そして人との距離感を豊かに味わった。”

これをお読みの方は、芸術を“体験”して誰かに伝える時、どんな言葉で伝えますか？簡潔に伝えることは効率的、時に効果的です。しかし、現場で起こった熱のようなものが、平たくなってはいませんか。では、“体験”を提供する立場の時、どう伝えていらっしゃいますか？

申し遅れましたが、私はえんげきをやっている人です。舞台役者と、作品を書く活動を自身の演劇工房でゆるやかにしています。5年前から表現教育のファシリテーターやワークショップデザイナーとして学校でワークショップ形式の授業に関わってきました。まだまだ現場に不慣れな身でありながら、この3月に教育系のファシリテーター活動を休止すると宣言したところです。理由は、教育現場と自身のやっている活動とのバランスが上手くいかなくなったから。このワークショップへ申し込んだのは1月。気合充分だった当時より、参加した3月は失礼ながらも気の抜けた状態でした。

ワークショップでは沢山のダンス(ムーブメント)やゲームが行われました。翌日に全身が筋肉痛になるほど、とても動きました。何故それをやるのかの問いかけはあっても説明はあまりなく、いつの間にか動いて表現して、誰かと組んで、相手を見て…。やらされている感覚は全くなく、表現への良し悪しの評価もなく、知らなかった参加者と息を合わせ、集中して人や空間を意識し、オープンな感覚でいられる事の喜びにあふれていました。

その結果、知らなかった参加者と知り合っていたのです。コミュニティ・ダンスの魅力(威力?)に後から気づきました。

日常で起こる楽しいことや人との関わり方とは少し異なり、とても深いところで人とつながる感覚。芸術分野でよく起こる何とも言えない心地よさを、このワ

---

どれもこれまでの俳優トレーニングや、様々なワークショップで体験した事のある物ばかり。特別な物はないのかもしれない。でも組み合わせと進行によって、様々な障害を持つ人たちと共に舞台芸術を創造する事が。

---

黒田志保(俳優  
/ファシリテーター)



ークショップを通して体感しました。

とかく芸術分野は、説明しづらい感覚的なものを扱っています。その大もとは表現したいという人間の基本的欲求でしょうか。コミュニティ・ダンスの場合、自己満足で終わらず、他者と共有しながら表現の欲求が満たされました。レイチェルさんは心が躍るような楽しさを、教えるのではなく認識させてくださいました。気の抜けていた人間が、熱のようなものを感じ、心満ち溢れたのですから、その変化をご想像いただけたらと思います。

セミナーも非常に興味深いものでした。彼女はアーティスト、マネージャー、ファシリテーターの顔を持ち、「役割が変わってもアーティストであるからどの現場でも思考は繋がっている」と笑顔でお話されました。具体的な仕事内容としては、デバイング、様々な人とのダンス、ライフコーチング、タレント育成・コミュニケーター、貧困地域対策。やったことのない仕事も面白そうと思ったら飛びつき、やりながら体得されてきたとか。

彼女の活動する環境は、芸術の社会的役割が日本より認知されているようでした。そのためなのか、アートと一括りにせず、様々な役割を自信持って話す姿が印象的でした。

さて、日本でも芸術をツールとしたコミュニケーション活動等が盛んになっていますが、指導者の立場になった時、日本の現状で必要性をどう説得するのか、芸術における熱のようなものをどう活かすのか。時にややこしいと私は思っています。「楽しいから」だけでは仕事になりづらい世の中。学校などから「コミュニケーション力をつけるために...」「道徳的な...」とニーズがあった場合、生徒と『〇〇を学ぶために芸術的な何かをやる』ことになり、芸術本来が持っている熱のようなものとの結びつけ方に、私は困る事が多いです。なぜなら、芸術に答えはなく、それを通して感じることは人それぞれでOKだと思うので、評価基準を決めると違和感を覚えるのです。また、道徳は人格を左右するものですし、効率化社会の中で幸福とは何かと問われる中、何を共有すべきか悩んだことも。

ワークショップで、レイチェルさんや魅力ある参加者の真剣な姿を通して再認識したのは、アマとプロの壁、芸術と応用的芸術の壁など、へだたりを超えて重要視すべきものでした。

**芸術は、本来妥協するためにやるものではなく、本気でやって心底楽しいもの。**

花咲く3月。スタジオ内で見えた風景は、桜よりも繊細で美しい、人が生きる姿と笑顔でした。こういった風景を、多くの人と共有したいものです。

この出会いに心から感謝を申し上げます。

(すずねあやこ／鈴音工房・主宰)

## “カメレオン” レイチェルが 教えてくれたこと

落合 咲野香

桜が開き始め、まだひんやりとした空気とうららかな日差しが混じりあう春の朝。レイチェル・スミス女史のワークショップ初日。期待で私の胸は膨らみわくわくドキドキ。そして、まだコートを羽織っている私の前に、ぺたんこサンダル、ノースリーブにリュックサックという真夏の山ガール風ないでたちをした端正な美女が現れました。レイチェルとの初対面です。

「スコットランドならもう初夏よ！」そのキラキラの笑顔に、私が勝手に抱いていた「スーパーウーマン」のイメージは一転しました。コンテンポラリーダンサー、エデュケーションオフィサー、振付家、歌手、演出家、ビデオアーティスト…数多







て発見することができました。そして、第3日。やはり動いて、感覚を解きほぐしていくゲームやワークから始めましたが、目玉は2日間で得たたくさんのワークをベースに、グループで障害者のためのワークショップを企画する課題に挑戦しました。どのような障害かの設定だけがあり、あとはワークショップの目的も、状況もすべて自分たちの想像力をつかって決めていきます。私は障害者の方とワークしたことが全くなく、一方で同じグループには経験豊かでその大変さをよく知っている方もいました。私のグループは学習障害を持つ子がいる青少年グループであるという設定にしたのですが、2日間で体験したワークの種類を振り返ってみると想像以上に膨大で、どれを組み合わせたらいいか決めるのに頭も体もフル回転。「これは緊張をほぐすのにいいだろう…。これをやれば自信がつく!」と、どんどん提案が浮かんでくる。でも、経験のある方から選んだワークがかえって彼らに劣等感を与えてしまう可能性があるのではないかと、難しいのではないかと意見が出され、悩む。あくまでワークの一つで自由に考えていい場ではあるものの、現実にある様々な制約や障害を考え設定し始めると、私はどんどん自由でなくなり楽しいことから大変なことをしている感覚になっていきました。自分は思いやりに欠けていないか、相手の立場にたてないのじゃないか。それは3日間で初めて襲ってきたネガティブな感覚でした。そして、企画は未完成のまま、レイチェルと参加者全員でのフィードバックが始まりました。皆と意見交換をしていくうちに、実際の現場の抱える問題や苦勞、スコットランドと日本の文化的な背景の違いなど、ワークを現実に活かすために乗り越えるべき事例がたくさん噴出してきました。そして、そこでもネガティブな感情になっていきました。確かに、現実には厳しいことが山積みです。3日間楽しいことしかしていなくて、たくさんの豊かな創造が高速で生まれた一方、ネガティブを持ち込み始めたときにイキイキしたエネルギーがしばみ創造速度が落ちていく…。自分も周りも。なぜなのか。

このことが私に一番大切なことを気づかせてくれました

た。様々なことをネガティブに、大変にさせているのは自分自身なのだ。実は、個人の現実に対する思い込みは自分で変えられるし、すべての行為を常に楽しく豊かなものに変化させることは可能だということです。レイチェルが『障害をもった子がいる』と担当したワークが、終わってみたらみんな普通の子だった」という事例を話してくれました。思い込みが障害を強調してしまうことも時にはある。まずは自分自身が自然体で偏見なく相手を受け入れること。それがすべての根幹であり、信頼が生まれれば人は想像以上に自由になれるのだということです。そしてまず協働してみて、困難なことに直面したらお互いに協力して乗り越える方法を考えてゆけばよいのであると。

振り返ってみると、まさにレイチェルの生き方がそうであるし、ワークショップ中も首尾一貫してこの精神が貫かれていたと感じました。そのレイチェルの在り方自体からポジティブで豊かな影響を受け取り、それが3日間のワークを皆で素晴らしいものに創っていくことができたのだと思いました。ありのままの自分で常にオープンであることが、自分も周りも魅力的にしていく。私が初日に感じたレイチェルの特別な「何か」の正体はまさしくこれでした。

自分自身の可能性を制限せずに広げ、カメレオンのように変身して、自分自身をどんどん多様化させていく。今まで俳優という立場でのみ演劇、そして社会に関わってきた私にとって、そのようなレイチェルの生き方は何て素晴らしく魅力的であるのだろうと衝撃を受けました。「そうか、カメレオンになってしまえばよいのか!」

レイチェルに出会ったおかげで、私は私に新しく出会うことができました。私も自分自身を大きな樹に育て、その上を縦横無尽に走り回るカメレオンになりたい! そして再びレイチェルとともにたくさんの人を巻き込んで実際に作品創造がしたい! その思いでいっぱいです。

(おちあいさやか/俳優)



シアタープランニングネットワークを設立して以来、様々なワークショップをキュレートし、実施してきた。主たる活動である。しかし、今回のワークショップ・シリーズほど、そのキュレーションに戸惑ったことは、これまでなかったかもしれない。

一つには、昨年夏、英国を発つ予定の2日前にレイチェルを襲った悲劇の記憶がある。二人の胎児を一時に失っただけでなく、自らの命も危険な状態に陥った夏から十分な時間はたっていない。11月、グラスゴーで、いまだ仕事に復帰していない彼女に対して、航空券をキャンセルしないまま残してあると伝えるには、少しばかり勇気を要した。

だが、レイチェルは果敢にも動き出した。

もう一つは、コミュニティ・ダンスなるものを、私自身がどれだけ理解しているのだろうかということだ。目的・対象は明快でも、その媒体・道具についての理解なしに、ワークショップ作りができるのか。参加者を集めるために、語る言葉がもてるのだろうか。私どものワークショップ顧客は、ドラマ教育、俳優トレーニングにこそ関心を持って、「ダンス」という範疇にアレルギー反応を示しはしないだろうか。しかも、レイチェルは大きな「ブランド」組織の所属ではない。

だが、これも杞憂に終わった。

3日間のセミナーとワークショップ・シリーズを経て、強く思うのは—レイチェルもまた実感しているのは—レイチェルと私が、専門性こそ違え、同じ類の人間、同じ気質を分かち合っていたことが、参加者にとって、そして、私たちにとって幸せな体験につながったということだ。

実際のところ、レイチェルも準備の過程で、私が望んでいるものをどこまで体現できるのか、悩んだと語っている。「ギャンブル」という言葉も飛びだ

## ワークショップを キュレートする ということ

中山 夏織

した。メールでのやりとりをしながらも、十分に議論できていたわけではない。お互いに遠慮があった。私が彼女の仕事をどれだけ理解していたのだろうか。そう、私たちはギャンブルに挑んだ—マネジメント教師としては、ギャンブルは避けるべきものだが、ときに直観に従って、失敗を覚悟に飛ばなくてはならないこともある。若干、言い訳めく。

初日のセミナーで、レイチェルが「Artists Head Goes Everywhere」という言葉を使って、いかなる仕事をする場合でも、自分のアイデンティティはアーティストであり、アーティストの創造性と想像力をもって、非アーティストの仕事（例えば、エデュケーション・オフィサー、プロジェクト・マネジメント、教師）に挑むと語った。この瞬間、私のキュレーションは間違っていない、そしてシアタープランニングネットワークのビジネスとして、最もふさわしい講師を迎えたのだということを理解した。

レイチェルの本領はワークショップでまさに発揮された。天性のアーティストであり、指導者なのだろう。目的が芸術そのものでなくても、演劇、ダンスのもつ芸術性が、遊びを促し、その遊びが学びへとつながっていく。いかなる対象と向かうときも、私たちがつねにアーティストでなければならないことが、まさに体現されたワークショップとなったのだと感じている。参加者たちも笑顔とパワーを、そして、好奇心と創造性をさく裂させた。

キュレーターとして、最高の満足感を味わう。

しかし、ギャンブルばかりはしては行かない。学びを求めてやってくる参加者への責任がある。そして、その参加者が向き合う子どもたちや高齢者たちへ。もっと勉強しなくては。アンテナを張って、もっと多くのことを学ばなくては。もっとクリエイティブに。もっと挑戦的で、もっと刺激的で、さらにクリエイティブなプロジェクトを仕掛けられるように。

(なかやまかおり／プロデューサー  
・ドラマ教育アドバイザー)



# ナショナルシアター物語 (9)

連載

中山 夏織



1937年11月。オールドヴィックはローレンス・オリヴィエ主演の『マクベス』の上演準備をしていた。タイトルロールをいうまでもなくオリヴィエが、マクベス夫人はオーストラリア出身の女優ジュディス・アンダーソンが演じた。この公演には歴史の転換とも思われるいくつものエピソードが伴う。一つには、映画での名声を片手にしながらも、苦手とする韻文の台詞を不可欠とするシェークスピア俳優たることを自らのアイデンティティに据えたオリヴィエの挑戦が、古典的な優雅さを求めるシェークスピア劇にパワフルな現代性をもたらしたことである。古典的な演技を求める筋には若干の戸惑いもあって批評は二分した。だが、オリヴィエの生涯のライバルのジョン・ギルグッド

は「最高のマクベス」だと絶賛している。私にとって興味は、その演出にフランス人演出家で俳優トレーニングの第一人者ミシェル・サン・ドニの名前があることである。さらに、このシーズンこそがオールドヴィックが「ナショナルシアター」を目指すきっかけになったらしいことである。

だが、これは表の顔。裏側では、SMNTとオールドヴィックのガバナーたちによる紳士・淑女の駆け引きが続けられていた。二つの組織に板ばさみになったのが、リットン卿とエディス・リテルトン夫人である。SMNTに関わりながらも、オールドヴィックのガバナーを務めていた。サウス・バンクの再開発の動きも顕著になるなか、SMNTはサウス・ケンジントンへの新劇場建築を望み、建築家の選定にもはいていた。SMNTとしては、オールドヴィックでも許しがたいのに、さらに荒んだ場所にどうしてナショナルを、といったところだろうか。「外国人観光客に対して恥づかしい」。

ともあれ、この『マクベス』が、オリヴィエの体調のゆえに数日の延期を経て幕を開けた公演の前日、リアン・バイリスが世を去った。享年63歳。バイリスこそがオールドヴィックであり、オールドヴィックはバイリスそのものだった。死の床にあっても「オールドヴィックはすべて大丈夫なの？」と気遣っていた。公演の延期は議論されたものの、そもそもの日程から3日遅れの予定日に幕を開けた。バイリスの葬儀には、多くの著名な俳優やダンサーたちが駆けつけた。シビル・ソーンダイクは弔辞で述べた。「(オールド)ヴィックは決して失敗しないのです。なぜなら、神の仕事であり、シェークスピアのための、そして人々のための家だからです。彼女(バイリス)は神秘的な存在であり—ジャンヌ・ダルクのような炎が…。39年にわたるバイリスの時代の幕引きとともに、歴史が大きく動き出すことになる。だが、その前に歴史のもう一つの顔が覆いかぶさってくる。第

二次世界大戦である。

1938年頃までには戦争への危惧が巷にあふれていた。ガスマスクが市民に配られたのもこの頃のことである。しかし、いまだオールドヴィックには華やぎが残されていた。1937-38年シーズンの目玉として、『マクベス』に続いて、オリヴィエの『コリオラーナス』、そして、オールドヴィックのこれまでの水準とはかけ離れて豪華な『夏の夜の夢』が繰り広げられた。舞台美術はオリヴィエ・メッセル—ディアギレフ・バレエ団の1925年のロンドン公演のためのマスクのデザインを担当したことからそのキャリアを始めた逸材である。また、サドラーズウェルズのバレエ団からダンサーたちが駆り出され、妖精を踊った。このとき、ダンサーたちは宙釣りにも挑んだという。ラルフ・リチャードソンのボトム、ロバート・ヘルプマンのオベロン、そして、ヴィヴィアン・リーがタイターニアを演じた。

1938年1月、この公演の観客のなかに、当時、11歳のエリザベス王女と7歳のマーガレット王女の姿があった。ガースリーの回想によると、「エリザベス王女は興奮のあまり、ほとんど貴賓席のボックスから落ちそうだった。妖精たちがどうやって飛んでいるのかを突きとめようとしてね」。

しかし、この華やぎも長くは続かなかった。戦争への恐れが次第に観客の減少へとつながった。チケット価格を下げて、その減少は加速した。1939年1月、戦争の懸念が高まるなか、「カンパニー」は3カ月にわたる海外公演へと出向いた。ブリティッシュ・カウンシルの支援により、ポルトガル、イタリア、マルタ、ギリシャ、エジプト諸国をツアーした。

「ブリティッシュ・カウンシル」は1934年に設立された国際文化交流機関だが、その出自と当時の「目的」はかなり生々しい。外務省情報局を前身とし、第一次世界



大戦に対敵国プロパガンダ及び情報操作省を平時向けに縮小した組織として、外務省と植民地関連省、ならびに教育省の出えんにより設立された。20世紀初頭に対外貿易の後退が進み、イメージアップの必要性にも迫られていた。1929年のダベルノン報告書は「英国文化に親しみがわくほど、貿易には有利である」と勧告していた。実際、1922年に英国から独立したエジプトは、文化的にはフランスが支配する状態が生まれていたのである。

印刷物のみならず、技術の進展がもたらしたレコード、ラジオ、映画の進展は、国と国との関係、戦争のあり方へも大きく影響を及ぼした。

この長期にわたる海外ツアーに対し、減少していたとはいえ、熱心な観客からは反対の声が上がった。「ムッソリーニのお膝元で公演をやるのか!？」。ツアーを取りやめない限り、3階席から飛び降りると脅した男性もいた。カンパニーは各地で熱狂をもって迎えられたが、イタリアの皇太子はカンパニーにいち早く帰国するよう勧めたという。

帰国後、タイロン・ガースリーが後継者としてオールドヴィックとサドラーズウェルズの2つの劇場を運営していくことになった。彼は意図的に、マネジャー（支配人）というタイトルを、ディレクターに変更した。どんなにバイリスの運営が優れたものであったとしても、異なる歴史を編んでいかななくてはならない。バイリスは地元ランベスの労働者階級の観客を好んだが、いまやオールドヴィックにはロンドン中から観客が訪れている。同じあり方でいいはずがない。

1939年9月1日。ドイツがポーランド侵攻し、9月3日、英国とフランスがドイツに宣戦を布告した。ついに、第二次世界大戦が勃発したのである。

戦争の到来とともに、ロンドンの劇場に闇が訪れた。最初にクローズしたのが、リージェント・パークの野外劇場だった。数日のあいだ、多くの劇場はなんとか生き延びようと努力したが、劇場のみならず、娯楽施設すべてが、緊急事態に対応し、閉鎖された。ところが、この時から40年春までは、ドイツと英仏とのあいだで本格的な戦争のない「奇妙な戦争」と呼ばれる時期が訪れた。劇場は少しずつ再開を模索し始め、クリスマスの頃にはほぼ通常に戻った。オールドヴィックも1940年2月、再開場した。

その折に、ガースリーは長期にわたる芸術ポリシーを観客に向けて提示した。要約すると、「大衆の支持を得た今、もはやナショナルシアター足ることをめざすことは白昼夢ではない。もちろん、スト

ラッドアボンエイヴォンを無視するものではない。緊密なコラボレーションが不可欠なのだ。公的資金をもって、オールドヴィックをナショナルシアターに、サドラーズウェルズをオペラとバレエの家…。だが、我々はいま戦時下にある。いまはすべての計画を差し止めなくてはならない。若者たちは招集されている。ブラックアウトが待っている。所得税の高騰もあって、もはや資金は枯渇している。だが、明らかにしておきたいのは、劇場に不可欠なのは金ではなく、観客動員である。平時であれば、50%程度の動員で劇場はまわしていける。だが、高騰する物価のなかで、この野心的なシーズンを展開するには、4分の3を超える観客動員が必要とされている。毎夜二つの劇場を埋める3,000人の観客が必要なのである。真面目な劇場は、その支持者たちが手を叩き、妖精を信じることに満足しているだけであれば、ティンカーベルのように生き続けることはできない…」。

観客に対しての強烈なアピールとなったが、成功したわけではなかった。それでも、ガースリーはひるむことなく、そのシーズンの幕開けに向かっていく。ジョン・ギルグッドの名演が魅了した『リア王』と『テンペスト』である。

1940年9月、ロンドンへの空襲がはじまり、劇場は再び閉鎖を余儀なくされた。翌年5月には、オールドヴィック自体が空襲の被害を受けた。復旧するには資金がかかる。だが、何よりも空襲が続く中、いま復旧する意味があるのか？

ガースリーが決断したのは、国内ツアーの展開である。バーンリーというランカシャー州の町に拠点を移し、北イングランドの38都市とウェールズを巡演した。一方、オペラとバレエ団はオーケストラの代わりに、2台のピアノを携えて、各地を巡演した。空襲のさなかのやむを得ない選択だったが、この活動がオールドヴィックを、サドラーズウェルズをさらに「パブリック」な存在へと高めた。

とりわけ、オペラとバレエ団は、これまでオペラにも、バレエにも触れることがなかった街や村の人々に「出会い」を提供した。映画『リトルダンサー』の冒頭で、祖母が「バレリーナ」になったかった若い日のことを思い出すシーンがあるが、この巡演に魅了されたのだと推量してしまう。

この巡演こそが、質素ななりであっても、「ナショナル」たるものの気品をもたらした。後に、オペラ団が、イングリッシュ・ナショナル・オペラに、バレエ団が、バーミンガム・ロイヤル・バレエへとその姿を変えていく契機はここにはじまる。

(次号へ続く)

## 障がいをもつ児童青少年たちに 演劇体験を！

### 2015年度 TPNファンドへの ご支援のお願い

「ホスピタルシアタープロジェクト2014」は、キリン福祉財団ならびにアーツカウンシル東京からの助成と、TPN ファンドに寄せられたご寄付により、10ヵ所の障がい者施設や団体、病院をツアーすることができました。この場をお借りして、ご寄付いただいた方々に心より感謝いたします。

2015年度は、これまでの施設の巡演に加え、新しい試みとして、児童ならびに障がい児教育の高い実績をもつ「こども教育宝仙大学」の校舎の一つをお借りして、その空間すべてを劇場へと変え、障がいをもつ子どもたちの五感を刺激するプロムナードシアターを提供する計画を進めています。多くのアーティストに参加を求め、子どもたちの「祝祭」を創造したいと願っています。

しかしながら、このような活動に対し、支援の手を差し伸べられる団体の数は限られており、資金調達に苦戦しております。

劇場に足を運べない子どもたちに演劇を届けるプロジェクトに、また、一人ひとりに寄り添いながら、より深い体験をプロジェクトに対しての、皆様の心からのご支援をお願いいたします。

#### ★ご寄付の方法について★

摘要欄に「TPNファンド」とご記載のうえ、郵便振替口座へご送金くださいませ。

郵便振替口座 00190-0-191663

1口 3,000円

#### 特定非営利活動法人 シアタープランニングネットワーク

〒182-0003 東京都調布市若葉町 1-33-43-202

Phone & Fax 03-5384-8715

Mail [tpn1@msb.biglobe.ne.jp](mailto:tpn1@msb.biglobe.ne.jp)

Web <http://www5a.biglobe.ne.jp/~tpn>

#### ◇編集後記◇

2000年12月にNPO法人化して、今年度は、シアタープランニングネットワークにとって15周年を迎えます。「いつまで続けるの」というより、「いつ辞めるの」という声をさらりと聞き流す一方で、アートマネジメントの教師でありながら、NPO運営に求められるミッションというものや、大きなヴィジョンというものを、はてまた維持できる発展なるものを模索しないまま続けてきてしまったことに気づきます。

運営というのはいさぎよくとじゃないのよ、という半面、きれいごとそのままにしておきたいという思いから、組織を大きくすることもせず、雇用を求めず、地味でささやかながらも、不可欠だと信じるプロジェクトを続けてきました。判断の基準となってきたのは、肩書やブランドではなく、あくまでも、その人の／その組織の本質的な「チカラ」だったと、自信をもっていえることを誇りたいと思います。

かつては営利を求め、派手な目立つ仕事を担うのは民間で、地道で厄介な仕事を担うのは行政という棲み分けが当然のことと考えられていたように思います。ところが、いつの頃からか、この構造が逆転してしまった。また、民間のなかでも大きな団体の一人勝ちの構造がどこか望まれるようになってきた。公的・民間助成も成果という華やかさを求めている。成果を急ぎ、評価に怯える社会がここにある。

小規模ながらも、専門性をもつNPO法人の役割というものを、改めて考えていきたいと思っています。

閑話休題。ドラマ&シアター教育に長く携わってきましたが、昨年夏とこの春のダンスをベースとしたプロジェクトのおかげで、ダンスの素晴らしさに出会いました。ダンスと演劇をもっと統合したコミュニティ&エデュケーション・プログラムをめざします！

(中山夏織)

#### 特定非営利活動法人

#### シアタープランニングネットワーク (TPN)

舞台芸術関連の様々な職業のためのセミナーやワークショップをはじめ、調査研究、情報サービス、コンサルティングなど、舞台芸術にかかるインフラストラクチャー確立をめざすヒューマン・ネットワークです。国際的な視野から、舞台芸術と社会との関係性の強化、舞台芸術関連職業のトレーニングの理念構築とその具現化、文化政策・アートマネジメントにかかる情報の共有化、そしてメインストリーム・シアターとコミュニティ・シアターの相互リンケージを目的としています。2000年12月6日、東京都よりNPO法人として認証され、12月11日、正式に設立されました。

#### theatre & policy シアター&ポリシー

TPNの基幹事業として、2000年6月から定期発行(隔月間・年6回)しています。定期購読(準会員)をご希望の方は、左記のTPNファンドの郵便振替口座の摘要欄に「定期購読希望」と記載し、年会費3,000円をご送金ください。

発行・編集人 中山 夏織